

# 夏季の食い込みアップ対策～糖蜜で夏場もおいしく～

高梁管内 K牧場

## 事例の内容

### 1 夏季の採食量減少をいかに防ぐかが、酪農経営の大きな課題

夏季は、採食量が落ちることで、乳量の低下や選び食いによるルーメンアシドーシス等の疾病発生を招きやすい季節です。夏季の採食量減少をいかに少なくするかが、本県酪農経営における大きな課題です。このため、送風機や細霧冷房装置を設置する等、各経営で様々な対策がとられていますが、ここでは飼料給与の工夫事例を紹介します。

K牧場は、経産牛99頭、育成牛10頭、計109頭を飼養しており、牛舎はフリーストール方式です。飼料給与はTMRを朝夕2回給与しており、このほかフィードステーションで個体別に濃厚飼料を給与しています。また、TMRの餌寄せを1日5回以上しています。

### 2 糖蜜利用で採食量の減少を防ぐ

K牧場で実施されている工夫は、水に溶いた糖蜜を、ジョウロでTMRにかける(ジョウロに詰まらない程度に水で溶く)というものです。これは、特に採食量の減る昼以降、餌寄せ後に行います(写真1)。



写真1 水に溶かしてジョウロでかける

### 3 糖蜜液散布の効果

糖蜜液をかけると、餌寄せただけの時と比べ、はるかに牛の食いつきが良くなり、ほとんどの牛が集まってきます。牛は糖蜜のかかっている部分を好んで食べるため、糖蜜液散布が採食量アップに貢献していることがわかります(写真2、3)。



写真2

ジョウロを持って歩くだけで牛が飼槽にでてくる。

牛は糖蜜をかけたところを好んで食べる。



写真3 糖蜜液散布直後の採食状況

## 技術解説

### 1 あと一口を食わせるワザ

夏場に残飼が多くなるのはどこの農家でもよく見られる。残飼をそのままにしておくとな変敗してしまい異臭を放ち、一層牛は食べなくなる。そのため、給与した餌はその日の内に全て牛の腹に入ることが経済的にも、牛の生理的にも望ましい。

牛は特に甘味に敏感な特性をもつため、残飼に水で溶いた糖蜜をかけ食欲を促進させるのは、あと一口を促す手軽な方法である。

### 2 糖蜜の長所

- (1) 嗜好性を上げる。
- (2) 微生物の活性を促し、微生物体蛋白の合成量を増加させる効果がある。
- (3) 糖蜜の発酵速度は早いので、サイレージ等の早い蛋白分解速度を持つ飼料と同調し、ルーメン内のアンモニア濃度の上昇を防ぐ。

## 参考にする場合の留意点

### 1 糖蜜使用量に留意する

糖蜜は発酵速度が早いため、多くやりすぎるとルーメン内pHが低下し、アシドーシスになりやすくなる。また、下痢も発生しやすい。

搾乳牛用の配合飼料には2～5%の糖蜜がすでに含まれているので、使用する糖蜜の量は、原液で1日1頭当たり400～500g以内となるようにする。なお、幼齢牛は糖蜜に多く含まれる蔗糖を分解する酵素活性が低く、下痢を発生しやすいので特に注意が必要である。

### 2 分娩前3週間(クローズアップ期)の乾乳牛への糖蜜給与は避ける

糖蜜にはカリウムが多く含まれているため、ミネラルバランスを、分娩後の乳熱発生率の高い方向に導く。従って、分娩前3週間(クローズアップ期)の乾乳牛への給与は避けた方がよい。

### 3 夏季の採食量減少対策は総合的に

夏季の採食量減少対策は、単一の方法では十分な効果は上がらない。いくつかの方法を組み合わせることが必要である。K牧場においても、送風機を5頭に1基、牛床より4m高に設置しており、また、細霧冷房装置を設置(細霧30秒間停止60秒間、温度27℃以上 湿度60%以下で稼働)している。

餌寄せ(採食時に前に飛ばした残飼を牛の前に押し戻してやること)も、あと一口を食わせるためには欠かせない方法である。K牧場が、1日5回以上の餌寄せを実施していることも参考にして欲しい。